

龍 声

東龍寺報

平成元年三月廿五日創刊
 発行編集所 〒959-1502
 新潟県南蒲原郡田上町
 曹洞宗 東龍寺
 電話 (0256) 57-3395
 FAX (0256) 57-2174
 ホームページ
<http://www.ginzado.ne.jp/ryusei/>
 E-mail
ryusei@ginzado.ne.jp



眼蔵会案内

本年は第八回眼蔵会を五月十五日(木)～十七日(土)に行います。
 駒澤大学仏教学部教授・角田泰隆師より、「諸悪莫作」の巻を
 御提唱いただきます。是非、ご参加、ご修行ください。

「永平七十八世宮崎奕保禅師・世壽百八歳」御遺骨尊前での安位願經
 於・永平寺法堂、一月十一日午後五時三十分
 導師・永平寺顧問・永井孝道老師、侍者・小生、待香・寒河江文洋師

尊きご縁をいただき

東龍寺住職 渡辺 宣昭

正月五日の朝、朝課の最後に諸堂に線香を立てながらお参りをしている時、札幌の法友から、電話が入り、禅師様遷化の報を知りました。初相見して以来、祖山安居中、その後現在に至るまで、数々の尊いご縁を頂いた事を思い起こし、溢れ出る涙を止めることが出来ませんでした。特に、安居中の思い出を御遺徳を偲びながら、綴らせていただきます。

故禅師様が、昭和五十六年秋、監院として本山に上山された翌年の春、修行二年目の小生は、監院寮へ配役をいただき、宮崎監院老師(しばらく老師と呼びます)のお側にお仕えすることができました。

老師は、振鈴三十分前には、部屋をお出になり、まだ真つ暗な中、坐禅堂へと向かわれました。坐禅堂では修行僧たちが寝ておりますので入り口で待つこと暫く、振鈴が鳴り、修行僧たちが起きるや真つ先にお堂にお入りになり坐を組まれる日々でした。

そんな折、一年に何回かの曉天大放参の朝、振鈴前に、いつもお飲みになる煎じた薬草を入れて沸かした鉄瓶をお持ちし、そつと、お部屋の戸を開けますと、なんと机に向かつて坐禅をされる老師が目飛び込んで参りました。黙々として自己の光明を照らす禅師号「黙照天心禅師」そのままのお姿でした。お声をかけようとした息をぐつと呑み込み、思わず手を合わせ、ご迷惑にならないようにとそつと戸を閉めました。私にとって生き仏様を拝んだ一瞬でした。

また、老師は、「禅機を働かせなさい」とよく言われました。夏の蒸し暑い日、来客があり、冷たいお絞りをお持ちしました。すると、「弘学和尚(本山での小生の呼び名)、こんな暑いときこそ、よーく絞った熱いお絞りがいいんじゃないぞ。」と言われました。なるほど、後で試してみると気持ちいいものでした。しかしながら、場合によっては冷たいお絞りの方がいいときもあるのです。その時々、相手の身になって、最善を尽くしていくことを教えていただきました。

数々の気づきを与えてくださった老師の行者を勤めていて、とても不思議な体験、お言葉に触れる事が度々ありました。雲水はスリッパを壁に向かって脱いで部屋へ入ります。老師と廊下を歩いていきますと、時々腰を屈められて深い息をしながら、乱れて脱いだスリッパを直されては、「是でスリッパが成仏した」と、また、お部屋の線香が曲がって立てられていて、「こら線香を直しなさい」まっすぐに立て直すと「これで線香が成仏した」と。戸をパーンと閉めたりすると、そと閉め直させては「これで戸が成仏した」と、いつも腹の底から湧き上がるような独特なお声でニコニコと微笑みながら言われました。当時はそれぞれの物を大切に扱いなさいと言う意味かなあとおりました。平成十六年に放映されたNHKスペシャル「永平寺一〇四歳の禪師」で、「私は宮崎奕保だ。私が永平寺だ。永平寺と私は一つ。自分くらい大切なものはないけれども、この大切な自分は、大勢の雲水たち、七堂伽藍を中心とする建物、木々・山・川・鳥や獣などの自然環境とともに生きている。人も環境もみな自分だから永平寺を大切にすることが自分を大事にすることになるのだ。」というお言葉をお聞きして、二十数年を経て、「自分と自分以外の人や物との間に垣根を造らない自他一如の教えをお伝え下さっていたのか」と気づかせていただきました。

十一日の密葬、火葬場までお見送りをし、午後四時近くに、ご遺骨が上がりました。それまで二百名近い随喜衆がお待ち申し上げ、舍利禮文が火葬場のホールに響く中、皆で遺骨を拾いました。その折に何と若い宗侶が多いことか、あらためて驚きました。故禪師様の日常の修行底、若い修行僧と共に坐る姿勢、「修行の浅い深いではない、日々の一歩一歩の歩みこそが大切なのだ」というみ教えの実践が伝わっていたのでしよう。

火葬場より本山に戻り、法堂須弥壇上に安置されたご遺骨への安位諷経、二十数年前の宮崎監院老師の侍者を勤めた往時を懐かしく思い出しながら、導師・永井孝道老師の侍者を有り難くも、お勤めさせていただきました。

末筆ながら、生生世世の中、大禪師様と再眉が叶いますよう念じて、報恩感謝の拙文といたします。

- 遷化(センゲ)：この世での教化を他界へ遷(ウツ)すこと。
- 初相見(シヨシヨウケン)：はじめてお会いすること。
- 監院(カンニン)：禪師様がお留守の時、本山を護る最高責任者。
- 禪機(ゼンキ)：禪僧が他に対して示す独特の鋭い言行。
- 暁天大放参(キョウテンオオボウサン)：普段より起床が二時間遅く、朝の坐禅が全くなし。
- 生生世世(シヨウシヨウセセ)：生まれ変わり死に変わりして、未来幾万世を経ること。

◇ 巻頭言に寄せて ◇

この度の巻頭言は、大本山永平寺の月刊誌「傘松」二月号に掲載されたものに若干の加筆をしました。

宮崎禪師は、東龍寺へ三度お越しになつておられます。最初は昭和六十年春に、旧横越の沢海・大栄寺様の御本葬の折、お泊まりの門前の「わか竹」から、スリッパ履きで、散歩に來られ親しくお会いすることができました。

そのご縁から、檀信徒のご協力を得て、昭和六十三年の梵鐘・鐘樓堂再建法要に副貫首として、平成十二年に照光殿(坐禅堂)落慶法要に永平寺貫首として、お越頂きました。

永平寺開闢七百六十有余年、七十八代の禪師様方の内の最高齢、また、生涯を坐禅一筋に貫かれた高德の禪師様とご縁を頂いたことに深く感謝し、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

曹洞宗 心の電話 ○三一二四五四一五四一〇

こちらに電話をすると、全国の曹洞宗の方丈様達が一週間交代で、三分間の「ほとけの心」をわかりやすく説いた法話が流れます。二十四時間いつでも繋がりますので、是非、お聞きください。

東龍寺住職も平成十八年度より、年二回担当しております。本年度は、九月九日、十五日、三月三日、九日です。お待ちしております。

「第七回眼蔵会」

に参加して

五泉市 阿部 洋 夫

東龍寺様より眼蔵会の開催の御案内が今年も送られて来た。早速日程等確認して参加する事にした。

私のように田舎におる者には滅多にない機会だし、毎年連続して生の講義を拝聴出来ると思うとその日の来るのが楽しみでもある。

第四回の眼蔵会から参加で、その年は菩提薩埵四摂法・第五回発菩提心・第六回現成公案、そしてこの度の摩訶般若波羅蜜の巻を学習したが、頭の中に残ったのは僅かばかりである。年度毎に今年は正法眼蔵の中のこの巻を学ぶと案内されるので前もって予習をしてみるのが効き目はみえずというのが実感である。講義の最初にお唱えをする『大智禪師発願文』に思わず心するばかり、もう少し頑張らねばと感じた三日間でした。

講師の原文読み下しの格調の高さに自然と姿勢を正すこと度々であった。又この度の講義では講師ご自身の経験・エピソードに幾度も感銘を受けた。

差定(日割り表)は例年と大きく変更もなく、ほっとしました。今年は写経の際に写仏が加わっていたが全く経験がなく、不安であった。講師の説明を受けて描いてみたが写すという事が簡単なよう



眼蔵会：中日(5月18日)、釈尊降誕会出班灌沐罷(お釈迦様の誕生を祝う法要後)の集合写真
(筆者：二列目左より四番目)

で出来た作品の仏様のお顔が原図に比べると全く勝手に描いていたのがよく判った。線を一定に引くことの難しさには苦労をした。もう少し時間に余裕があればとも思った次第。

私の希望としては坐禅六回の内、一回だけでも坐る時間をもう少し長くしてもらえたらと思っております。

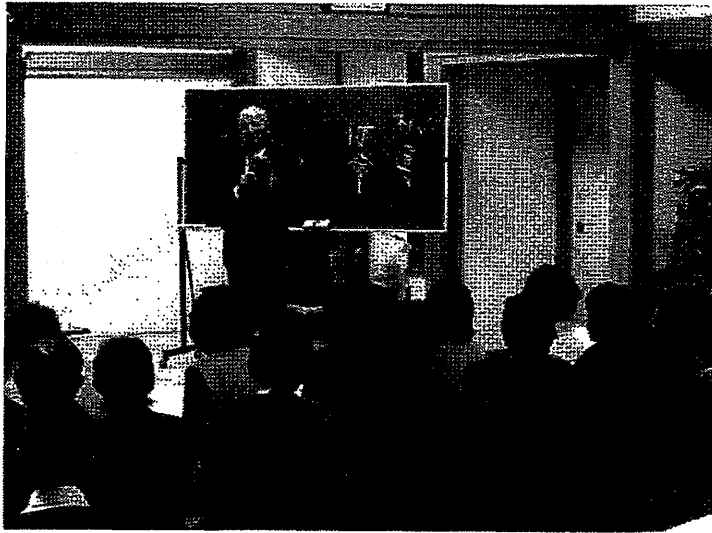
最後になりましたが、毎年私共眼蔵会参加者のために食事を作つて下さる典座職の方々に心より感謝申し上げます。次にこれも毎年率先してトイレを掃除される方々にも感謝申し上げます。来年の五月皆様との再会を楽しみに。

〓 住職より一言〓

阿部さんの真摯な態度での眼蔵会参加に心より感謝申し上げます。僧侶と在家の方が共に学ぶこの会を大切にしていききたいと思っております。

「家庭の絆・家庭の大切さについて」 開眼寺 柴田住職から教わったこと

原ヶ崎 山川 洋子



講演中の柴田文啓老師

昨年、十月末、秋の仏教講演会に初めて参加させて頂きました。恥ずかしいのですが、このような催しがあるということを知りませんでした。今まで、何ともつたない事をしてきたのだろうと講演会のお誘いを受けた時に思いました。どのような方が、どんなお話をされるのだろうと、ワクワクしながら会場である我が菩提寺へと向かいました。

講師の柴田住職は長野県にお住まいで、以前は米国にも赴任されていたビジネスマンという経歴の持ち主。ダニデーで素敵な方でした。

スライドを使って、写真や新聞記事等によるわかりやすい親切な話し方、聞き手に対する心遣いや気配りに、住職のお人柄の良さを感じました。

様々な事例や米国での経験をユーモアたっぷりに語った後、アメリカの家庭と今の日本の家庭の違いについてお話されたのですが、

一番の違いは、家庭における躰(しつけ)の背景にキリスト教という宗教を持っているということ。

この講演で住職が一番おっしゃりたかった事、伝えたかった事は、立派な子孫・社会を次世代に残す事、この事が私達人間の使命であり、一番大きな仕事だということ。

そして、その立派な人間、善い人間は、家庭で育むのだ。そして、その為に必要なもの、一番大切なものとして宗教があるのだということ。

私達の宗教は仏教ですから、仏の教えに導かれ、それを指針として子供に教えてゆく、宗教心を取り戻すことによって人間性を高めてゆきましょうということだと思いました。

四人の子育てで迷ったり悩んだりすることが多々あります。子供達の心を健やかに育む家庭とはどうあれば良いのだろうかと考え、お釈迦様の教えを学び、正しい生き方・考え方を子供達に伝えていけるようしっかりと仏教徒であることを自覚し、凡夫ではありませんが、宗教心、お釈迦様をうしろだてに幸せな家庭、平和で穏やかで安らぎのある家庭を築くことが私達の使命なのだと思いました。

講演会の終盤で、住職が「素晴らしい地球を次世代に渡していきましよう」とおっしゃった時、胸がキュンとなり、涙がこぼれました。心から共感したからだと思います。

仏教ルネッサンスを興す一員になりたいというのが今の私の願いです。
自称、仏教オタク 合掌

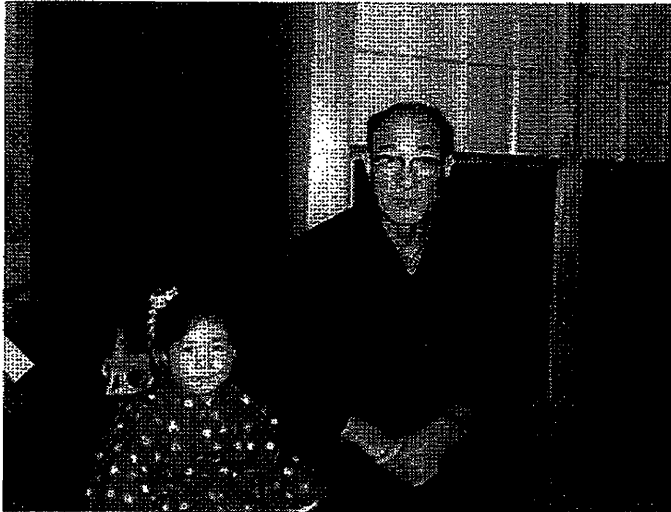
「住職より一言」

山川さんは、平成十八年から、御自分のお子さんを連れて、月例坐禅会に参加されるようになり、それが縁で多くの子供達が参加するように導いてくださいました。若い親子が坐禅にお寺に宗教に親しみを持ち、拠り所としてくださることはたいへん嬉しいことです。

おじいちゃんへ

東京都 西川裕子(旧姓・渡辺)

おじいちゃん(渡辺喜一郎氏)、おじいちゃんには心から可愛がつてもらいましたね。私の「裕子」という名前もおじいちゃんがつけてくれたのですよ。死にも狂いで家族のために働き続けた両親のもとに生まれる私に、物心共に裕(ゆたか)で幸せな人生を送ることができるようにと、願いをこめてつけたんだよ、つて教えてもらいましたね。おじいちゃんの願いのこもった大切な大切な私の名前です。



幼少の頃の筆者とおじいさま

おじいちゃん、おばあちゃん子で育った私は、おじいちゃんが夕食時になると話してくれる漢字やしきたりのお話がいっぱい楽しめました。くちうるさいだけでなく、どんなに出掛け先でお酒を飲んで帰ってきてお酒を飲んだ履物は、乱れることがなかったし、お箸のつけかたも綺麗で、お魚の食べ方も行動で教えてくれたおじいちゃんでした。

中略

おじいちゃんはまさに駆け抜けたという表現がぴったりの人生だったけれど、そのおじいちゃんの生き方から絆の大切さ、絆の深さを身をもって知らされたように思います。



墓地参道入口に備えられた手桶棚

それと共に、パパ(渡辺喜彦氏)がママと出会い、二人で支えあつたことで、お兄ちゃん曰く「俺の親父は子どもが困っていたら海を泳いだって助けにきてくれる親父だ。」と言いつつ、私達にプレゼントしてくれたこと、おじいちゃんがいなければ今のパパがいないということ、本当に本当に感謝しています。大好きなおじいちゃんへ

(平成十九年六月六日通夜の折、奉読された弔辞より)

住職より一言

西川裕子氏のお祖父様・故渡辺喜一郎氏は、東龍寺水子地藏奉賛会初代会長として、奉賛会の発展にご尽力下り、また、昭和六十三年に行つた鐘楼堂再建並びに梵鐘再鑄工事の発起人の一人として、お骨折りを頂きました。

そして、ご子息である喜彦氏は御尊父に勝る篤信家で、月二回の墓参と一時間以上を掛けての墓掃除の実践には、頭が下がります。

この度は、墓地参拝用の手桶棚をご寄付頂き心より感謝申し上げます。

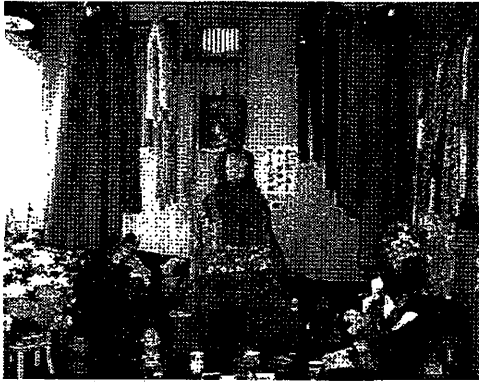
お地藏様寒いですね

本田上 江部金之輔

お釈迦様が入滅して弥勒菩薩が成道するまでの末法のあいだ、お釈迦様から衆生の救済をゆだねられた菩薩が、お地藏様であると伝えられています。地藏様の大悲代受苦(他人に代わって苦しみを受けること)によって衆生の苦しみが救われると云う地藏信仰が庶民層に広がった。

田上にもいつの時代に誰の発願か百参拾余(故木津河衛氏調査による)の地藏様が建立されてその大半が露天に安置されている。その集落には今もその利益(りやく)や由来が伝承されている。以前から才歩(さいかち)川の土手の祠堂に安置されていた才歩の地藏様、霊験灼(あたらたか)なりと近郊の人たちの心の拠り所になっていたが、今は下手の仮祠堂に安置され、それも久しい。大衆の信仰心により、風光り水温む安心(あんじん)の地に安置されることを祈念する者であります。 合掌

「愛語よく廻天の力あることを学すべきなり」



才歩地藏様

住職より一言

平成十五年六月に才歩地藏様を現在の仮安置場所に御遷座して、早六年目を迎えました。霊験あらたかな様々なお話を聞いております。ようやく才歩川の改修工事も終わりに近づき、現在安置されている周りが公園になりますので、その一角に正式にお祀りいたします。多くの信者がお参り下さるよう念じております。

菩提寺に詣で往時を偲ぶ

新潟市党路津 立川 勇一



折平寺参拝の折 平成二年七月七日

私の住む党路津から、菩提寺のある護摩堂山の麓の地・田上までは車社会でなかった時代、交通の便が悪く、その上寺墓地に先祖の墓がなかつたのでつい疎遠になっておりました。昭和五十五年父母の年忌に先代方丈様の計らいでそれまで畑の一隅にあった先祖の墓を寺墓地に建てさせていたのですが、それ以来自家用車で都合のつく限りお参りに訪れております。大きな行持のある時は車が混み合いますので、村の親戚の方が同乗させてくださるので有難く思っております。

私事で恐縮ですが、退職後何か趣味を持たねばと思っていた矢先、荻川コミュニティセンターの広報紙に短歌の記事が載っていましたので、仲間作りと年を重ねても作歌できるのでは、と思つて入会してからはや十二年になります。会員の方はそれぞれ人生経験豊かな人が多いので私の知らない知識や話し方など教わる事が多くあります。中でも私より二十歳年上の九十六歳の方が歌会のリーダー役をやっておられ、的確に歌の批評をして下さいます。女性では九十歳の人が歌会に出席されますので、私などは元氣をもらい又励みにもなります。拙歌ですが、お寺に因んだ歌です。お盆の行事の一つの墓掃除を知ってもらうため、孫と一緒に墓掃除をやった事を詠んだ歌です。

□墓掃除の慣はし孫に言ひ聞かせ里山の麓の菩提寺に来つ
 □雨曇る むし暑きなか 女の孫と 菩提寺に来て 墓洗ふなり
 □女の孫と菩提寺に墓洗ひ終へ正午(ヒル)近ければ食堂に寄る
 歌友と共に励まし合い楽しみながら続けたいと思っております。

ゝ 住職より一言ゝ

昔は、覚路津への仏事は泊まりがけで伺ったと伝え聞いてお
 ますが、現在は車で二十五分とたいへん近くなりました。
 立川さんを始め、皆さん信心深い方が多く有り難く思っており
 ます。これからもよろしく願います。

めぐり逢い

下吉田 辻川 友明

今年一月、高校卒業後の進路報告に、三年ぶりに東龍寺様にお
 邪魔しました。

私は、中学校時代の三年間、勉強と坐禅でお世話になりました。
 当時の私は、お寺に足を踏み入れることが少なかったので、
 それだけで体がこわばるような緊張感を覚えたものでした。

勉強会では、先生はいつも優しく丁寧に私たちに接してくれ、
 自主性をとても尊重していてくれるように思いました。ですが
 ら、そこにいと何か心休まる温かい空気に包まれていて、しだ
 いに緊張もほぐれ安心感を覚えるようになっていきました。先生
 の言葉は、素直に受けとることができ、とても尊敬できる方だと
 思いました。

「肝心の勉強はといえば、初めのころは「何のためにするのか」、
 「なぜするのか」、意味もなのまま、ただ必然性だけでやってい
 たように思います。



夏期合宿の飯台(筆者：右より三番目)平成15年8月28日

坐禅会では、長い時間同じ姿勢
 を保ち、足の痛みをこらえながら、
 いかにして心を「無」の状態にし、
 精神統一できるかを心がけました。
 「これがいったい何なのかなあ。」
 「何かたためになることなのかなあ。」
 と自問していましたが、当時小学
 生の弟に、「坐禅は良いから一緒
 にいかないか。」と勧めていまし
 た。実際に弟も、私と一緒に何度
 か参加させていただきました。そ
 ういう私も実は、東龍寺の勉強会
 に通っている頃の兄に、勧められ
 て参加しました。

そんな中で私は、次第に自分が
 「何で勉強するのか」、「何のた
 めに勉強するのか」将来の目標み
 わることなく、現在の大学で勉強
 しています。そこでの勉強は、
 とても興味深く新たな発見がた
 くさんあります。
 これまでいろいろなる場所で、さ
 まざまな人とめぐり逢い、支え
 られ、助けられてきました。この
 東龍寺様での出会いも、とても
 大きかったように思います。さら
 なるめぐり逢いを求めて、自ら
 の道を進めるよう努力していきたい
 と思っております。そして、こ
 のきずながずっと続いていくこと
 を願っています。

ゝ 住職より一言ゝ

辻川君は、平成十三年度中学入学
 でした。数学のセンスがとて
 も優れていて、それを伸ばしてい
 ってくれたことが、とてもうれ
 しく思います。中学時代は色々悩
 み苦しみがあつたようですが、
 その苦しみが今の喜びをつくつて
 いるのだと思います。立派な大
 人になってください。

【東龍寺年中行持】

- 七月 金毘羅大祭
- 八月一日、うららばん会(盆参)
- 八月廿四日水子地藏尊並びに、観音様大祭
- 九月廿三日秋のお彼岸会 (お彼岸の中日)
- 十月十二日常齋米法要
- 十二月三十一日 除夜祭(除夜の鐘)
- 大般若祈祷会
- 一月一日 寺年始(近隣の檀家)
- 一月二日 寺年始(遠方の檀家)
- 三月廿一日春のお彼岸会 (お彼岸の中日)
- 【平成十九年度事業、行持報告】
- 一、五月十七日(木)～十九日(土)に、駒沢大学教授角田泰隆師を講師にお招きし、第七回眼蔵会を講本「摩訶般若波羅蜜」で、開催した。
- 一、七月十二日、第十八回金毘羅大祭を修行。
- 一、九月二日(日)～四日(火)に第二回(二回の内)奥州三十三ヶ所観音霊場巡拝の旅を行った。
- 一、十月二十九日(月)午後七時より、田上町仏教会では、長野県臨済宗開眼寺住職柴田文啓老師をお招きし、第十二回秋の講演会を行った。
- 一、月例加茂法話会は、穀町商店街振興組合二階を貸り、幹事平山ヨイ氏らの協力により、開催している。

【参禅の報告】

- 一、四月二十日「第二七回卯辰会の集い」(代表三条市・内山荘)十七名参禅。
- 一、五月一日、田上小三年生六四名総合学習で参禅と東龍寺歴史説明。
- 一、七月二十九日、田上小六年と保護者二〇名が、坐禅・朝粥。
- 一、八月二十日、田上町社会社協議会「ボランティアチャレンジスクール」坐禅体験、十七名坐禅。
- 一、十月二四日、癒し坐禅をNSTスマイルスタジアム取材。
- 【平成二十年事業、行持案内】
- 一、五月十五日(木)～十七日(土)に、駒沢大学教授角田泰隆師を講師にお招きし、第八回眼蔵会を講本「諸悪莫作の巻」で、開催する。
- 一、六月十一日(水)～十三日(金)に、田上本山講では、「大本山永平寺参拝と南知多半島の旅」を行う。
- 一、七月六日(日)～八日(火)に秩父三十四ヶ所観音霊場巡拝の旅を行う。
- 一、例年十月十日の常齋米法要は、当日、東龍寺を会場に宗侶対象の北信越管区布教講習会が行われますので、十月十二日(日)に変更いたします。
- 一、十月十三日(月)午後七時より、田上町仏教会では、東龍寺を会場に、愛知県浄土宗・西居院住職・廣中邦充老師をお招きし、第十三回秋の講演会を予定している。
- 【月例坐禅会の御案内】
- 一、月例坐禅会を毎月第二土曜日夜七時半より行っています。どうぞ、お気軽にご参加ください。
- 【心の癒し坐禅体験】
- 一、毎週水曜、木曜(祭日は除く)の午後四時から、約一時間、湯田上温泉宿泊者に坐禅修行体験をしていただいております。
- 【梅花講のお知らせ】
- 一、梅花講では、毎月七日と、二十二日の二回練習をおこなっています。お始めになりたい方は、お気軽にご参加ください。
- 【その他の照光殿での催し】
- 一、大正琴のお稽古を先生をお招きし、有志で行っております。興味のある方、のぞいてみませんか。
- 【お寺よりの御礼とお願ひ】
- 一、七月、二二世内室の篤志により、駕籠(かご)を修理し、本堂西序室中に安置した。



先代住職の遺影が、駕籠に乗っています。

一、九月、三条・渡辺喜彦氏より、墓地参拝用の手桶棚をご寄付頂きました。

一、今年はお盆の棚経回りを下記の日程で行いますので、ご理解とご協力の程、お願いいたします。

【お盆前住職】新湯・亀田・三条・巻・燕・白根・長岡

【十三日住職】新津・覚路津

【東岸寺若様】中山・赤波・笠巻・三ツ屋・三枚湯・市ノ瀬

【お盆中住職】本田上・上野・羽生田・川船河

【光明寺様】川之下・原ヶ崎・下吉田・鎌倉・新保・龍玄・嶋・庄瀬・石田新田・後藤・曾根・横場・加茂地区

【少林寺様】山田・湯古屋

【少林寺若様】湯川・谷・中店・山崎

編集後記

寺報二十号を発刊するに当たり、阿部洋夫氏、山川洋子氏、立川勇一氏、江部金之輔氏、西川裕子氏、辻川友明君より、ご寄稿を賜り有難うございました。今後とも皆様よりのご寄稿をお待ち申し上げております。

甥の少林寺徒弟佐藤孝昭君(今年小学六年)が、昨年八月十一日に得度式(正式にお坊さんになる式)を行いました。お盆棚経に皆さんの所へお参りにあがるかと思いますが、よろしくお願ひします。

合掌